

通信

No. 53

2014年 夏号

発行：子育てサポートくるみ

住所 羽曳野市壺井508-1

TEL 072-957-3282 FAX 072-958-4089

<http://kosodate-kurumi.com>

「子育てサポートくるみ」は、共同保育園を運営し、学童保育、障がい児保育、障がい児通所支援事業、子育て支援事業を行っているNPO法人です。

子どもを育むのに大切な「自然・環境」「食事」などにこだわりを持ち、全国や海外からも体験や見学にお越しいただいています。

卒園を迎えて思うこと

2014年3月に年長児13名が卒園し、学童6年生1名がくるみを巣立ちました。

年長児は引っ込み思案で仲間の中でも自我を出すことが難しい子どもたちでした。そんな13人の子どもたちでしたが、年長の1年間の体験（合宿保育やものづくり、仲間とともにする労働）で自信をつけ、仲間意識が育ち、みんなで考え合える集団へと変わっていきました。

学童6年生は1名だけで学童の活動の中心的役割を全て担うのは難しく、活動日や夏休みの班活動、行事の取り組みなど、5年生も協力して行いました。困難や問題があると、保護者も一緒になって考え、話し合いを重ねることで乗り越えていきました。

卒園式では年長児はリズムで自分を表現し、一皮むけて堂々とした姿を見せ、卒業生はピアノ伴奏で在学学童の子どもたちと合唱し、素敵な歌声をひびかせ、感動に包まれました。

この日をくるみ全世帯の親たち子どもたちで祝うことを長年続けています。「みんなでみんなの子を育てる」ことは、くるみの保育理念です。我が子だけでなくみんなの子が育つことは、我が子も育っていくということ。一人の力ではなく、共に手を取り合い協力しあうことで困難も乗り越えていけることを、一つの節目である卒園、卒業の時に感じます。

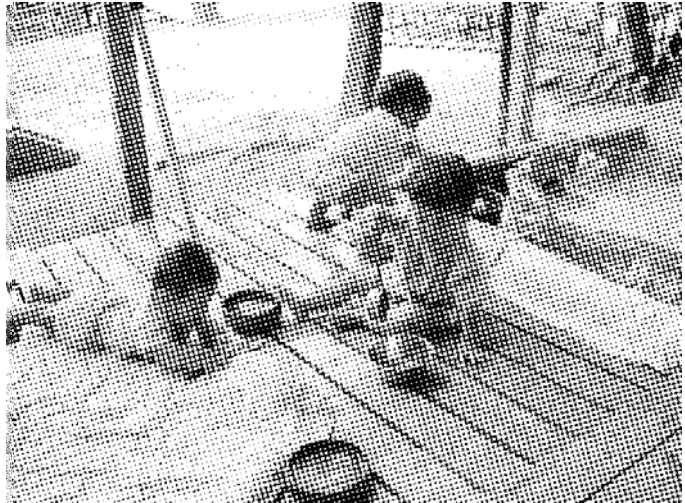
くるみは「共同保育園」が原点です。園と保護者が共に学び合い、話し合い、模索し協力して歩んできた歴史があります。2014年度は来年度からの保育制度の変更に伴い、くるみの今後のあり方をより意識することが求められます。くるみの保育理念が失われることなく、未来の子どもたちにもくるみという子育ての“場”を残していく方法を、みんなで知恵を出し合い考えていきましょう。

くるみ保育園 園長 山田房江



0歳児の保育

くるみでは、どの年齢においても生活リズムの大切さを伝えています。中でも0才児は生活リズムが要です。大人でも寝不足だと身体がだるかったり、気持ちもすっきりしないことがあると思いますが、赤ちゃんの場合は、てきめん生活の姿に表れます。しっかり眠れないと機嫌も良くないことが多く、食べられない（飲めない）、遊べない（泣いてばかり）こともしばしばです。



くるみでは、生後3ヶ月頃から起きる時間を一定にしていきます。そうして午前睡、授乳、午後睡等の時間も徐々に一定になるように生活を作っていきます。24時間の子どもの生活をその子（月齢）に合わせて作っていくためには、家庭と園の連携が大切です。

毎日一定リズムで生活をするのが0才児の子どもにとって心地よい生活であり、そうすると心も安定し、よく遊ぶと感ずります。

“あのおもちゃに触りたい”“あそこに行きたい”など、赤ちゃんは好奇心いっぱいです。その好奇心に答えるべく、くるみの0歳児部屋には色々な楽しい工夫がいっぱいです。

3・4ヶ月の赤ちゃんは仰向けで遊びます。そこで、ちょうど赤ちゃんが手を伸ばして届きそうな位置におもちゃを吊るしています。この近すぎず遠すぎない位置がポイントで赤ちゃんはおもちゃに触りたくて手を伸ばし始めます。

動きが出てきた子どもには、その子その子の発達を考えて室内、時には園庭にもハイハイ板を組み立てたり（斜面や段差やデコボコ）、外へも自ら向かって行けるように部屋から園庭につながる縁台にも斜面段差を作ります。

毎日同じおもちゃ、斜面では子どもの興味が薄れていきます。そこで毎日、必要があれば午前と午後でも変化させて、子どもが“もっともっと”と意欲的に動きたくなる環境づくりも大切に保育しています。

また、赤ちゃんは表情、身振り手振り、そして全身を使って自分の思いを表現します。その表現から子どもの気持ちを汲むことも、とても大事だと考えています。

言葉でまだ伝えられないからこそ、大人は目を見て何を伝えたいのか感じ取り、受け止め、応えたり、言葉で返していくというやりとりを丁寧にします。そうしたやりとりの中から信頼関係や、人間関係の土台がつけられると考えています。

離乳食についても、くるみでは野菜スープを5ヶ月頃から始めますが、野菜1種類ずつ子どもの様子を見ながら丁寧に進めていきます。

生活リズム、遊び、離乳食等、くるみの0歳児の保育に興味のある方は、毎月「赤ちゃんの子育て」を実施しています。ぜひ遊びに来てください。

広木先生の子育て講座が行われました

去る4月27日、今年も広木先生の講演会が行われ、200名を超える参加がありました。参加者の方からいただいた感想の一部をご紹介します。

参加者の方からの感想①

広木先生のはなしを聞いて、いまの子どもを知ることは、子どもを取り巻くいまの社会を知ることにもつながるのだということを改めて感じました。

学生のころから政治の話になると難しいからと敬遠しがちだった私にとって、子どものおかれている状況、子どもの育ち、環境や文化、どれをとっても学びなくして保育はできないのだと身が引き締まる思いがしました。

また、“いい子が一番たいへん。”大人の目を気にして動けてしまうものわがりのいい子は実はそこに自分がない、自己決定をしてきていないから、あとで本当に苦しくなるという話の中で、子どもの心に自己肯定感を育てることの意味を考えさせられました。広木先生が「土台にある「育ち」これがしっかりとあってはじめて「教」がくる」とおっしゃっているように、子どもが仲間と一緒にあそんで体験を通して育て、その中で自己決定をしながら、自分のやりたいことを見つけていくこの経験は決して「教」えられるものではないのだと感じました。ここで学んだことを今日からの生活に返していきたいと思います。

参加者の方からの感想②

「新自由主義」が、日本よりも先に進んでいるアメリカの教育現場の話聞いて、背筋が凍る思いがしました。

教育の市場化によって、チャータースクールに企業が参入してきている。広い部屋で、一人ずつついたてで仕切られ、130人の生徒がヘッドホンにモニターで机に向かう。時給17ドルで雇われたアルバイト講師が、これを一人で見守る。シリコンバレーの会社社長は、これを支持している。決して自分の子どもは、ここには入れないけど……。

「新自由主義」を押し進めてアメリカに追随している日本でも、「経済格差による能力格差」は確実に広がっていると、学校現場にいるとひしひしと感じます。

今の日本の大学入試や入社試験では、「基礎・基本」でなく「思考力を問う問題」が増えていて、自然や文化に触れる体験をたくさんさせてもらえる裕福な家の子ほど、今まで以上に有利になっているとお話もあり、今の日本の悲しい現状だと思い聞いていました。

今の日本は、学校にも成果主義が導入されています。その顕著な例が「全国一斉学力テスト」と教員の「評価育成システム」です。成果主義のもと、競争に追い込まれているのは、子どもだけでなく、先生どうしです。

私が初めて小学校の教壇に立ったのは、15、6年前で、この評価システムの導入前でした。臨時講師で、現場力に乏しい私に隣のクラスの年輩の女の先生は、こっそり私に「困ったことがあったら、授業中でも聞きに来てくれていいよ」と言ってくれて、ものすごく心強かったことを覚えています。若い先生を陰で支えたり、各先生の個性ややり方を尊重したり学びあったりする雰囲気は今よりあった気がします。

(次ページへつづく)

(前ページからのつづき)

10年前から、評価システムが導入され、各先生は、S、A、B、C、Dで、評価され、今ではその結果が給料にまで反映されます。教育現場が忙しいのは、今も昔も同じなのですが、以前のよ
うな、職場での、ほっとする人間関係が薄れてきたと感じます。自分がどれだけ、学校に貢献した
か、いい先生かを周りにアピールする必要がでてきました。そして、手のかかる児童や問題の多い
学年は、事情を知らない転任者や臨時講師が担任するという事態も、ひっそりとおこってきました。

後輩の先生を助けたり、アイデアをだしあったり、見えない所で、学校や子どものために尽くし
ていたそれまでの先生たちの美徳が、「競争」によって危機に瀕している気がします。

私が、支援学級を担当した時、管理職の一人から、「今や支援学級といえど、成果を出さないと
ね。数値目標をたてるくらいでないと。」と最初に言われました。

担任していた子の一人Mちゃんは、事情があって家庭でほとんど甘えることができず、いつも私
と二人になると、勉強を拒否して、地面にひっくりかえって赤ちゃん返りをしました。

広木先生の言うところの「先生と遊びたいという、自分の要求が出せている状態」です。悩んだ
末、私は毎日いろんな遊びを考えて、時には体育館借りきって他の子ども交えて、色んな道具をつか
って遊んだり、クッキー作りをしたりしてすごしました。

Mちゃんは、少しずつ私を信頼してくれて、少しずつ勉強にも前向きになってくれました。

でも、そうなるまでの間、「一対一やのに、文字も教えず、子どもを甘やかしている」という周
囲の先生たちの冷たい目は、ずっと突き刺さっていました。「きちんと机にむかっている状態」以
外は認めてくれませんでした。

子どもが毎日、学校を楽しんでいると思う事、友達や先生を好きと思うこと、新しいことを知ったり、
できるようになったりして嬉しいと思う心の動きって、テストの点のように数値化はできません。

でも、この数値化できないこと、目には見えにくいけど大事なことが、成果主義に毒された学校
では、ないがしろにされています。

学校が、「学びの共同体」ではなく、人材をつくる「工場」になっているということですが、私
の知っている先生には、「学びの共同体」をつくろうと頑張っている人もいます。

大震災の後、現地まで行ってボランティアした後、総合学習でエネルギー問題や原発について保
護者も巻き込んで、みんなで学び、議論し、そのうち子どもたちが自主的にベルマークを集める活
動を始めだして、福島へ手紙と募金をした（被災された方にしたら微々たる額ですが・・・）そう
です。

成果主義にさらされて、日本の子ども達や先生たちも、厳しい立場におかれています。ほと
んどは力も可能性もたくさん秘めていると私は思っています。

保護者のコーナー

○ 年長の一年を終えて 西原さん

年長の1年に何が待ち受けているのか？楽しみでもあり、恐ろしくもあり、子供より私の方が緊張していたように思います。

生後10ヶ月からくるみに通いだし、毎年卒園式では年長さんの素敵な姿に感動し、何時の日か我が子のそんな姿を見ることが出来る日を楽しみにしていました。しかし、年長さんになったからと言って、急に素敵になる訳も無く、現実と理想のギャップにどうしたものか…と思う日々の連続、とてもマイペースでこちらが何を言っても都合の悪いことは右から左にさっさと聞き流し、飄々としている我が子の姿に、いつになったらシャキッとするのだろうか、少しは年長さんの自覚を持ってほしい、など隣でやきもきさせられました。

何度も声をかけているのに毎日の荷物の用意を出かけるぎりぎりまでしない、行く時間になって大騒ぎする、そして怒られる、年長さんの前半はほぼ毎日こんなかんじでした。ある日、こちらの堪忍袋の緒が切れて、何も持たせずくるみに行かせたこともありました。心配になって電話をして年長担任の丸谷にいきさつを伝えたとこ、本人はしれっと「あーなんか荷物忘れたわ」と単なる忘れ物みたいに言っていたようで、理由を聞いた丸谷と園長の山田さんが年長さんみんなに行く用意について話をしてくれました。その日を境に彼が変わったということもなく、その後もやはり自分の身の回りのことをなかなかしようとしないう姿に「合宿で痛い目みてもらいます」と丸谷から言われ、激しく同感しながら合宿に送りだしました。本人から合宿の感想でつらかった話、困った話はいっさい聞いたことがありません。合宿後の懇談で本人からは聞けない話を聞き、痛い目をみただけなのに打っても響かぬ姿に脱力し、もう見守るしかないなと思っていたところ、合宿を何度か経験した年長の後半には何となく少しずつですが身の回りのことが出来るようになってきました。

何事も毎日の積み重ねが大切だということこの1年を通して実感させられました。

10月のもみの木合宿に私もお手伝いとして参加させてもらい、合宿での子供たちの姿を垣間みることができました。姉妹園の父兄の方々和交流させてもらい、子供よりもこちらの方が楽しませてもらったと思います。

テレビもなく携帯の電波も届かないようなところで、本当に子供にとって心地よい生活リズムのなか、おいしいものいっぱい食べて、色々な新しい経験を友達とする。合宿に行ったら子供が日に日に元気になると山田さんから聞いていたことを、自分が体験することが出来て感動しました。

私自身、とても人見知りで年長の親の集団の中でなかなか一歩が踏み出せずいました。このままで終わるのかと思っていたのですが、合宿に参加して、共に参加した生駒母（年長の親）のガッツあふれる前向きさに触発され、森田さん（もみの木保育園の園長）のカリスマといってもいいくらい人間力を肌で感じる事ができ、つくづく世界って広いんだなと思いました。（大人になってあんなに気持ちがいいくらいいしかられることはないと思います。）

そして、もみの木保育園の職員さん親御さんの本当に暖かいもてなしと協力体制に感動し、当たり前にあると思っていた年間7回の合宿は多くの人に支えられて成り立っているということを実感するとともに、全国の姉妹園に同じような思いを持って、同じような苦勞をして、同じように子育てをしている仲間がいることに改めて気づかされました。

我が子が小学校に入学してから思うのは、くるみは第2の家なんだなということです。今までとは違う環境で慣れないなか、くるみに行くとはっきりしている子供の姿を見てこちらも安心する毎日です。これから学校にももっと慣れて行き自分を出せるようになると思いますが、家以外にも自分らしくいられる場所があるということ、親以外にも自分をわかってくれている、信頼できる大人が

いるということは子供にとっても親にとっても大きな支えになっていると思います。

最後に、年長の1年を支えてくださった在園の皆様、ありがとうございました。それぞれ時間的にも厳しいなか、集まると楽しくて話の尽きないわし親のみんな、卒園式で前にたって話すみんなの姿をみて、厳しい部活を乗り切ったチームメイトをみるような気持ちになりました。みんなのおかげで大変なことも笑って乗り越えられたと思います。ほんとうにありがとう。

そして、調理場から、時にクールに時に優しく子供たちの様子を見守り、ほんとうにおいしいご飯をたくさん作ってくれる山森さん、細川さん、しんどくて、たいへんで、びっくりするような合宿を年長の育つ力を信じて毎年続けてくれている職員の皆様、本当にありがとうございました。

みんなでみんなの子供を育てる、という言葉の意味を年長の1年で本当に身をもって経験させてもらいました。こんなに色々なことを感じる事が出来、考えさせられる、そして本当に忙しいけれど充実した日々を送れるのは年長の親の醍醐味だと思います。スポットライトがあたると輝く男と言われてきた我が子のDNAが誰からもたらされた物が納得した卒園式での父ちゃんのスピーチ。父ちゃんの意外な一面を知ることが出来たことも年長の1年を経験したからこそだと思います。本当にあつという間の1年間でした。下の子が年長を迎える時、その時はまた違った景色が広がるのだろうと思うと楽しみでなりません。今後とも親子共々よろしくお願いします。

○ 卒園を迎えた我が子へ 藤井さん

生まれて数年はどういうわけか背が小さくて、華奢な身体に白い肌、少し茶色の長い髪。女の子やハーフに間違えられることもよくあったね。子どもの時から英語漬けの環境を作って英語を習得させるという早期語学教育に賛成の立場だった父ちゃんの作戦が成功(?)し、マザーグースを口ずさみ、英語の絵本に親しんだ君は父ちゃんの自慢の息子だったよ。ところがいつしか気が付けば君は土に触れることも、裸足になることも拒む子どもになっていたね。

そんなある日のこと。君の長い髪は母ちゃんのバリカンによって丸坊主にされてしまった。そして母ちゃんは君を町はずれの山の中にあるさくらさくらんぼ保育を实践する共同保育園の年少に入れると言う。乗り気ではなかった父ちゃんだけど、母ちゃんの本気が伝わってきたとき、それを認めることにした。朝の登園時に大好きな母ちゃんから離れられなくて保育士さんにはがしてもらったのは最初の僅かの間だけで、君はあつという間に保育園が大好きになった。自然の中で保育士さんたちの暖かい眼差しの下、仲間との強固な信頼関係を得た君はどんどんたくましくなっていたね。

父ちゃんの仕事の関係でその園で憧れの年長を終えることなく大阪への転居が決まった時は、父ちゃんも母ちゃんも躊躇なく大阪でもさくらさくらんぼの保育園に入れることにした。それがくるみだよ。

くるみでは新たに素敵な12人の仲間に出会い、保育士さんたちに叱咤激励されながら、日々の生活をしっかりと積み上げることによって生きる根っ子を確立していったね。幾度の合宿を乗り越え、仲間とともに年長リズムをやり遂げた姿は本当に立派だったよ。

今、大好きなくるみを卒園し、慣れない靴下、今の君には不釣り合いな大きなランドセル、そして坊主頭に目深にかぶった学校帽。君は小学校へと続く通学路でしっかり前を見つめている。

ふと、あの頃のように英語で話しかけてみた。「どないしたん。何言うてんのん。」と父ちゃんを見つめる君の怪訝な眼差し。・・・うん、そうだ。三歳までの早期英語教育の効果なんてこんなもんだ。ましてや今の君に英語が必要だなんて思わないし、君が君として存在するだけで父ちゃんは君を誇りに思う。

君のために君の大好きな母ちゃんが選んだ保育園。保育園で一番育てられたのは実はこの父ちゃんだったかもしれない。